

## ガラテヤ書5章7節 「最後まで走る」

### 1A 始まりだけを見る過ち

1B 信仰による御霊

2B 終わりを見る神

### 2A 最後まで走らなかった人々

1B イスラエルの民

2B サムソン（肉の欲）

3B サウル（目の欲）

4B アサ（高慢）

### 3A 堅く立つ自由

1B 留まる務め

2B 保つ務め

3B 上から召される賞

## 本文

ガラテヤ人への手紙5章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、4章まで来ましたが、今日は午後礼拝で、5章前半部分を一節ずつ見ていきます。今朝は、7節に注目します。「**あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたの邪魔をして、真理に従わないようにさせたのですか。**」パウロが、ガラテヤの人たちの信仰を、競走に喩えています。よく走っていたけれども、途中で、走るのをやめてしまっている、と言っています。

パウロは、自分の手紙の中で数多く、人の信仰の歩みを、競走に喩えていますね。それは、ギリシア・ローマ社会の当時は、オリンピックなど、スポーツ競技が今の私たち以上に、身近だったからです。そこで、すべての競走に言えますが、要は、最後に誰がゴールを切るかに集中していますね。始まりが良いスタートでも、すべては最後に誰が一番早く走ったのかが問題になります。長距離走を見ればよく分かりますが、初めに快調に走っていても、次第に先頭を走るグループの人数は減っていき、最後は2-3人、そして本当に最後が一人になります。

### 1A 始まりだけを見る過ち

それが、信仰の歩みにも同じことが言えるのです。とどのつまり、どのような最期で生きて来たかが問われます。あまりにも多くの方が、どのように始まったかに注目しますね。自分のことも、他の人たちのことも、いつ、信じてバプテスマを受けたのか？そして、自分がどのような、イエス様に出会った体験をしたのか？過去を振り返って、その人の信仰のあり方を推し量ろうとしています。けれども、そこで足りないのは、今はどうなのか？ということです。いや、もっと大胆に言えば、「自分

がどのように終わるのか？」ということを考えて、信仰生活を生きているのか？ということでありませぬ。自分が、死か、あるいはイエス様が戻って来るか、どちらが先か分かりませぬが、その時に自分が最後まで、最初に抱いた確信を保っていく目標を持っているのかどうか、問われています。

## 1B 信仰による御霊

よく始めた人々であれば、数多くいます。ガラテヤの人たちもそうでした。彼らは、初めから律法に拘っていたのではありません。パウロは、ガラテヤの人たちが、十字架につけられたイエス・キリストが、自分たちの前に描き出されるほど、鮮明に見ていたことを思い出しています。そして、ただ、みことばを信じ、受け入れたら、御霊を受けたことを知っています。初めは、良く走っていたのです。ところが、3章3節でこう言っています。「あなたがたはそんなにも愚かなのですか。御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。」御霊によって始まったのに、肉によって完成させようとしているのです。御霊によって始まったのに、肉によって完成させようとして、信仰の競走から脱落していたのです。

## 2B 終わりを見る神

私たちは、最後まで走っている将来を見据えて、今を生きないといけません。いや、もっとはっきりいうと、初めに信じた時に、最後まで信じていきていくという覚悟を持って、イエス様に従う決心をしたかどうか？であります。

私たちの神は、終わりの時を見据えて、私たちを初めから救ってくださっていますね。神は永遠の方であり、初めも終わりもすべてを支配しておられるからです。イザヤ書には、最初から人々に呼びかけて、後に起こることを告げている神のことばがあります。「41:4 だれが、最初から代々の人々に呼びかけてこれらをなし、これらを行ったのか。【主】であるわたしだ。わたしは初めであり、また終わりとともにある。わたしがそれだ。」私たちの救いについては、終わりの時に、キリストにある栄光の姿に変えることを見据えて、それで初めから選んでくださっています。「ロマ 8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」

そうであれば、私たちも同じように、初めに信じる時に、最後に神がしてくださることを知って、それで信じるのではないのでしょうか？永遠のいのちを持つというのは、死んだ後にもあるいのちです。どのように死ぬか、あるいは、イエス様が再び来られる時に、どのようにお迎えするのか？を考えて、それで今、信仰の生活に入るといふ決断です。

## 2A 最後まで走らなかった人々

### 1B イスラエルの民

聖書の中には、信仰を全うした聖徒たちの証しが、数多く載っています。ヘブル書 11 章には、旧

約の時代に、信仰によって生きた人々の生涯を証しています。しかし、初めはよく走っていたのに、途中でつまずいてしまった人々の話、反面教師になるような事例も載せています。

イスラエルの歴史が、ある意味、その例の一つと言って、良いかもしれません。コリント第一 10 章で、イスラエルがいかに、主によってエジプトから救い出されて、主に守られていたかを教えています。ところが、彼らがいろいろな欲望によってつまずき、荒野で一世代が死に絶えるという結果を教えています。貪りや偶像礼拝があったので、滅ぼされてしまいました。それでパウロは、「10:11-12 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」良い始まりであったけれども、約束の地に入れなかったイスラエルの歴史は、世の終わりには倒れてしまっているという戒め、教訓なのだということです。イエス様も、不正の裁判官の喩えの中で、結論としてこう言われています。「ルカ 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってください。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」主は必ず、選ばれた民のためにその訴えを聞きに、戻って来てくださいますが、その時に最後まで信じている人たち、あきらめないで信じている人たちが、どれだけ見られるのだろうか？と尋ねています。

### 1B サムソン（肉の欲）

具体的には、例えば士師サムソンがいるでしょう。サムソンは、生まれながらのナジル人(Nazarite)でありました。髪の毛を切らずに、ぶどうから取れるものは一切食べないという、生涯、主に献げられた人でした。同じような人では、サムエルがいますし、また、バプテスマのヨハネも同じような生涯を歩みました(ルカ 1:15)。彼は、イスラエルを虐げていたペリシテ人と戦い、イスラエルを救うように召された人でした。それで、彼は、怪力が与えられています。御霊に満たされて、ペリシテ人をことごとく殺していきます。

サムソンは、その使命を全うして死んだとは言えます。けれども、悲しい最後でした。ペリシテ人に目をえぐり取られて、ペリシテ人の神ダゴンの宮で、彼は見せ物にされました。彼は、その柱に投げかかり、柱を倒したのです。それで宮全体が倒壊して、そこにいた人々、三千人が死にました。彼がなぜペリシテ人に捕えられたか？というと、ペリシテ人の女を好んだからです。彼は、女にくどかれると、自分の秘密を話してしまうのです。最後、デリラという女に、自分の髪の毛を剃られたら、この力はなくなると明かしてしまい、それで彼が眠っている間に、髪の毛を切り取られました。

### 2B サウル（目の欲）

イスラエルの初めの王と言えば、サウルです。しかし、サウルは退けられ、主はダビデを選ばれました。彼は、王となるためのいろいろな資質を持っていました。背が高く、美男子でした。父によく仕え、家畜を買っていました。預言者サムエルに、「あなたがイスラエル雌ろばがいなくなったのを

捜しに行きましたが、サムエルに、イスラエルを支配する王になると告げられました。サウルは、「Ⅰサム 9:21 私はベニヤミン人で、イスラエルの最も小さい部族の出ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、取るに足りない者ではありませんか。どうしてこのようなことを私に言われるのですか。」と語っています。そして王になった時に御霊に満たされて、アンモン人と勇敢に戦って、イスラエルを救いました。

しかし、彼は、最後、ペリシテ人との戦いで、恐れをなし、なんと霊媒師に伺いを立てました。そして、剣の上で倒れて自害しました。首を切り取られ、その胴体を、ベテ・シェアンの城壁につるされたのです。

なぜか？王となってからしばらくして、神の支配ではなく、自分自身の権威と支配に民を置こうとしたからです。ペリシテ人との戦いでは、「14:24 私が敵に復讐するまで、食物を食べる者は呪われよ。」と、無意味な誓いを立てていました。信仰によって、敵陣に入って戦ったヨナタンを、彼は殺そうとまでしたのです。そして、主が、アマレク人との戦いで、すべての人を聖絶しなければならぬ、家畜も惜しんではならぬと命じられたのに、アマレク人の王アガグを生け捕りにして、自分のために記念碑まで作りました。そして、妬みにかられたのです。ダビデを主が選ばれて、彼がペリシテ人を倒していくので、サウルがダビデを妬んだのです。ダビデを殺そうとして、執念を燃やしました。質素な始まりは、どこに行ったやら。高ぶりと妬みに満たされ、心は不安ですから、霊媒師に伺いを立てるといふ愚かさまで行ったのです。

### 3B アサ（高慢）

ユダの国に、アサ王がいます。彼は、ユダの王国を主に立ち返らせるのに用いられた人です。彼は、異教の祭壇を取り除いたりして、偶像礼拝を排除しました。主の教え、律法を守り行かせました。そして、なんと百万の軍勢がクシュ、南のアフリカから攻めてきた時に、「Ⅱ歴代 14:11a 主よ、力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたには変わりはありません。」とまで祈っているのです。それで、その大軍が倒れて、逃げ去ったのです。

ところが、彼の治世の後半で、北イスラエルの王がユダに攻めてきた時は、なんと、アラム、つまり今のシリアの王に金銀を送って、アラムの王に攻撃してもらったのです。主に拠り頼まず、人に拠り頼んだのです。彼は、そのことを叱責した預言者を牢に入れました。そして、彼は重い病気にかかりましたが、最後まで主を求めず、医者を探しました。主の御名に頼らず、人に頼っていつてしまったのです。

### 3A 堅く立つ自由

ですから、多くの方は、始まりの時はよく走っているのです。けれども、その競走で、自分自身や、周囲のものによって惑わされ、つまづき、その競走を放棄してしまう人々が多いということです。そ

ここで、聖書では、多くのことを信じる者たちには求めておらず、「初めの確信を最後まで保つ」ことについての勧めが、数多く書かれています。「ヘブル 3:14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」ガラテヤ書 5 章では、「堅く立ちなさい」という勧めで、そのことをパウロは言い表しています。「5:1 キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは堅く立って、再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい。」これから、何か特別なことを行っていくのではなく、今、すでに知らされているところにしっかりと立っていなさいということです。立っていることが戦いであり、そこから何とかして動いてもらおうと、いろいろな惑わしが襲ってくるからです。

### 1B 留まる務め

そこで私たちは、「留まりなさい」という命令を受けています。「ヨハ 15:4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。」信仰によって始まりましたが、信仰の内に留まるのです。御霊によって始まりましたが、御霊のうちに留まるのです。私は、新しく信じてから、こんな疑問を持っていました。「信じたら、次に何をすればよいのか？」答えは、「信じる」ことでした。信じたことが、足りないものであるかのように、次に何を行わなければいけないと思っていること自体が、間違いだったことに気づいたのです。信じているところに、留まる必要があります。ヨハネは第一の手紙で、初めから聞いていることに留まることを強調しました。「Ⅰヨハ 2:24 あなたがたは、初めから聞いていることを自分のうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いていることがとどまっているなら、あなたがたも御子と御父のうちにとどまります。」

### 2B 保つ務め

そして、留まることに似ていて、「保つ」こと「守る」ことが勧められています。「Ⅱテモ 1:14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」

黙示録は、終わりの日についての幻ですが、イエス様が戻って来る時に、これを行っていなさいと命じられているものがあります。アジアにある七つの教会に対して、その多くを語っておられます。それが、「初めに教えられたことをしっかりと守る」というものです。エペソに対して、「2:5a どこから落ちたのかを思い起こし、悔い改めて、初めの行いをしなさい。」と命じられています。ペルガモンに対しては、「あなたは、わたしの名を堅く保って」いるとほめられました(2:13)。ティアティラに対しては、「ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。」と言われています(2:25)。そして、フィラデルフィアに対しては、「あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかった。」と言われています(3:8)。力が多くなくてもいいのです、少しばかりの力でも、それに忠実であることが大切です。このように、初めに聞いて信じたものを、しっかりと守っていることこそが勝利なのです。

パウロは、このことを「自分の走るべき道のり」と呼んでいます。エルサレムに行く道で、そこで自分が殉教するかもしれないことを知りながら向かっているのですが、エペソから来た長老たちにこう言いました。「使徒 20:24 私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいと思いません。」それぞれ、自分に与えられた、走るべき道のりがあるんですね。他の人には他の道のりがあります。私には、主に与えられた道のりがあり、そこを走りぬくのです。

### 3B 上から召される賞

そして、ゴール地点があります。それは、キリストにあずかるというゴール、目標といってよいでしょう。主が戻って来られ、この方に見える目標といっていいでしょう。パウロが、ピリピ人への手紙で、その賞を得ることを目指して走っていることを話しました。「ピリ3:13-14 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、14 キリスト・イエスにあつて神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」

みなさん、ベン・ハーの映画を見たことがあるでしょうか？そこに、主人公のベン・ハーが、かつては友人で宿敵になったメッサラと、馬を引いた戦車の競走で熾烈な戦いをして、勝ちました。その時に、観戦していたローマ総督、ポンテオ・ピラトのところへ階段で上がっていき、月桂樹で作られた冠を受ける場面が出てきます。これは、ローマ皇帝が賞を与える時に、皇帝に召されて、その座のところまで上がっていき、賞を受けていたからです。パウロは、ローマに生きている人々には、だれにも知られているその場面を使って、「キリスト・イエスにあつて神が上に召してくださるという、その賞をいただく」と言っています。私たちには、主イエスがおられます。この方に召される時がきます。そして主イエスが、王として、私たちに冠を置かれる時が来るのです。この時が、私たちにとっての最後になります。競走を走り尽くして、その後で主ご自身から受ける賞を思いながら、今を走ります。熱心に神から受ける義を、御霊によって待ち望むのです。パウロが死刑になる直前に、書いたと言われるテモテへの第二の手紙には、こう書いています。「Ⅱテモ 4:7-8 私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」

ですから、その競走から、離れてはいけません。つまりきとなるのは、罪や肉の行いもありますし、自分で何とかして良い行いをして、神から認めてもらおうとする、律法の生活も大きな部分なのです。それは、信仰に留まる生活であり、御霊に留まる生活です。初めから聞いたことを、最後まで純粋に保つ生活です。そして、終わりの時から今を生きます。主が与えてくださる賞を目指して、今を走るのです。